

授業科目 生理学Ⅰ

【担当教員名】		対象学年	1	対象学科	理学・作業
宮岡 洋三 他		開講時期	前期	必修・選択	必修
		単位数	2	時間数	30
【概要】 生理学は解剖学と並んで、「生体」を理解する基礎となる。解剖学が「生体の構造」に主眼を置くのに対して、生理学は「機能（働き）」の理解を目的とする。両者は互いに密接に関連しているので、「生体」の理解にとって車の両輪と言える。本科目では、生体機能の基礎となる細胞機能、神経・筋機能、感覚機能、運動機能、また生命維持の基軸となる器官系のうち体液・血液の機能、心臓・循環機能および呼吸機能について学ぶ。					
【学習目標】 1. 細胞機能－ホメオスタシス、体液（区分、組成）、細胞小器官・骨格、物質移動（拡散、浸透、担体性輸送）－について説明できる 2. 興奮の発生と伝導－刺激と興奮、興奮閾値、不応期、静止膜電位と活動電位の発生機構、膜の等価回路、イオンチャネル、興奮伝導の三原則、跳躍伝導、二相性・単相性活動電位の記録、伝導速度の測定、神経線維の分類－について説明できる 3、4. 骨格筋収縮－筋の機能的名称、収縮測定法、単収縮と強縮、興奮収縮連関、張力－長さ関係、滑走説、力学モデル、負荷－速度関係－について説明できる 5a. 興奮伝達－神経筋接合部、終板電位、神経伝達物質、シナプス後電位、シナプス前抑制、シナプス結合様式、シナプス伝達の可塑性－について説明できる 5b. 自律神経機能－自律神経系の構成（中枢、末梢）と作用、自律神経系の伝達物質・受容体－について説明できる 6－8. 感覚機能－感覚受容器、受容器電位、感覚強度、体性感覚（表面・深部）、特殊感覚（聴覚、平衡感覚、視覚）、各伝導路－について説明できる 9. 血液と体液－血液ないしリンパ液の構成・特性・機能（呼吸ガスの運搬、免疫、血液型、血液凝固）について説明できる 10、11. 心臓、循環機能－心筋の電気生理学（心臓内興奮伝播、自動性、膜電流）、心電図、心筋と心臓の収縮、血管系の機能的区分、血行力学、血圧、微小循環、循環調節、特殊循環、循環障害－について説明できる 12、13. 運動機能－脊髄反射（感覚受容器、中枢機構、運動ニューロン）、脳幹・小脳の働き（姿勢制御、運動調節）、大脳基底核・皮質の働き－について説明できる 14、15. 呼吸機能－呼吸運動、肺容量、肺のガス交換、血液ガスの運搬、呼吸の神経的調節と化学的調節－について説明できる					
回数	授業計画・学習の主題			SB0 番号	学習方法・学習課題 備考・担当教員
1	細胞機能の基礎				講義、担当：宮岡 洋三
2	興奮発生と伝導				講義、担当：宮岡 洋三
3	骨格筋の収縮（１）				講義、担当：宮岡 洋三
4	骨格筋の収縮（２）				講義、担当：宮岡 洋三
5	興奮伝達、自律神経機能				講義、担当：宮岡 洋三
6	感覚機能（１）				講義、担当：宮岡 洋三
7	感覚機能（２）				講義、担当：宮岡 洋三
8	感覚機能（３）				講義、担当：宮岡 洋三
9	血液・体液				講義、担当：宮岡 洋三
10	心臓・循環機能（１）				講義
11	心臓・循環機能（２）				講義
12	運動機能（１）				講義
13	運動機能（２）				講義
14	呼吸機能（１）				講義、担当：宮岡 洋三
15	呼吸機能（２）				講義、担当：宮岡 洋三
【使用図書】		<書名>		<発行所>	<発行年・価格 他>
教科書 (必ず購入する書籍)		生理学テキスト（第5版）		大地 陸男	文光堂 2008・4,800円＋税
参考書		シンプル生理学（第6版）		貴邑 富久子、根来 英雄	南江堂 2008・2,900円＋税
その他の資料		生理学サイト（URL：http://www.nuhw.ac.jp/~physiol/）			
【評価方法】			【履修上の留意点】		
成績は、基本的に「小試験得点×実施回数」と「期末試験得点」の合計点で評価するが、出席状況も適宜加味する。			上の【概要】にも記した通り、本科目は「生理学Ⅰ」と連続している。したがって、習得が不十分な場合には、「生理学Ⅰ」の理解が困難となるので注意する。なお、期間中3～4回にわたって「小試験」を実施する予定なので、各自で学習の到達度を随時確認する。		